イケメン記者の

大物の予感！

no.23

偉大な代表が新たな勲章獲得

井上泰宏（いのうえ・やすひろ）
1986年生まれ　37歳
福岡県北九州市出身。大学卒業後ボートレース関係の会社に就職。2015年から日刊紙記者として若松ボートを担当後、20年から芦屋ボートに常駐。趣味は釣り。車のシート下に餌が転がり込んだことに気づかず、しばらく異臭を放ち続けたのがトラウマ。

若武者の台頭？　それとも？

各地で銘柄級を含めた地元勢が激しく火花を散らすGWシリーズ。芦屋を盛り上げたのは気鋭の若武者・藤森陸斗選手でした。芦屋ではいつも低調機を引いてしまってあまでもない、こうでもないと調整に忙しくしているのですが、エンジン更新から2節目で初下ろしのエンジンだったのが良かったのか、前検から好感触を口にするとツキも味方に大激走。並み居る強豪を抑えて予選トップ通過を果たしました。12Rに銘柄級の選手を持っていきたい番組の意向もあり、準優は第1弾の10R1号艇に。ただ、ここでも運は味方を続けました。準優前から急に向かい風が強まり、10Rは全員がSが届かない状態になって逃走。11RはダッシュSがSを合わせてきたものの、助走距離の短いスローは「コンマ20くらいサバを読んでも届かなかった」というレベルで、益田啓司選手がカドまくり一撃。12Rもほぼ同じ状況で「11Rで益田がまくったのを見て決めたんですよ」と、瓜生正義選手が珍しい3カド戦からまたもやまくり一発。こうして藤森選手が優勝戦1号艇を手に入れました。「初めて福岡3場の三大特選（正月、GW、お盆）を優勝した選手になりたい」と、意気込み強く臨みました。

藤森陸斗

芦屋歴代最多タイの17V

これを阻んだのが準優後にご機嫌で「2カドもありかな（笑）」と笑顔を見せてくれていた瓜生選手でした。ほぼ同体のスリットからイン藤森選手を締め込むと、1Mは益田選手に差されていましたが、2Mで絶品ターンを披露して逆転に成功。昨年12月の福岡周年以来となる優出と優勝を同時につかみました。

芦屋では17回目の優勝。これまでの16Vは現役最多だったのですが、これで歴代最多の植木通彦ボートアンバサダーに並びました。「植木さんとは走っている年数が違いますからね。でも、光栄なことだと思います」と走る、そして強い選手会代表が新たな勲章を手に入れました。

勝つだけでなく見せるレース

GWの次の一般戦には、芦屋GI6Vという、瓜生選手にも劣らない水面実績を誇るスーパースター・峰竜太選手が登場しました。初日から1着をズラリと並べましたが、予選終盤にかみ合わないレースが続いて予選は2位。4日目12Rは2着で予選トップ通過が決まる状況だったのですが、「条件は分かっていたけど、2着を取りに行くんじゃなくて、魅せてトップに立ちたかった」とあくまで1着を取りに行った結果3着。「悔しい。悔しいけど、悔いはないで

峰竜太

瓜生正義

すよ」と峰選手らしくファンを魅了するため、1着で舟券を買ってくれているファンのために目の前の勝負に全力投球をした結果でした。

悪いイメージを払拭

優勝戦は峰選手を抑えてシリーズリーダーの座に就いた畑田汰一選手が堂々の逃げ切り勝ち。「大好きな芦屋だから絶対に勝ちたい」と語っていた峰選手にも、鋭いまくり差しで入ってきた丸岡正典選手にも何もさせない完勝劇でした。畑田選手が芦屋を走るのは4節目。初めて走った時には準優でF、2度目は先頭を走っていながらも転覆して帰郷、3度目のGIでは予選落ちを喫していて、準優後には「今までは悪いイメージばかり」と苦笑いをしていたのが印象的でした。ただ「今回でいいイメージに変えられそう。勝てれば好きな水面にもなります」とも語っていたので、次に来る時は最高のイメージでスピードターンを見せてくれるでしょう。

ルール改正による苦悩

さて、その優勝戦でも注目選手だった峰選手と丸岡選手は、それぞれからつ、住之江のGW戦でFをした直後のシリーズでもありました。5月以降に適用された新ルールにはF2の事故点が20→30点に、さらにF2が優勝戦だった場合には30点→50点に変更されました。以前のルールでもF2をしてしまうとA1級キープはかなり難しくなってしまいましたが、事故点の消化はほぼ不可能と言えるルールです。事故率が0・70を超えるとどれだけ勝率を持っていようとB2級になってしまいます。2度のFで事故点が70点付いてしまうと、0・70を下回るには100走以上が必要。級別審査の期間内に全ての休みを消化すると仮定すると3か月走ることができないので、月に3節の全てを10走したとしてもこれには届かないのです。それだけでもかなり厳しいのですが、事故率が1・00を超えてしまうと〝魔の8項〟と呼ばれるルールに抵触するのです。8項に引っかかると半年間のあっせん停止処分が下されるので、走ってなんぼのボートレーサーにとってはまさに地獄の様な制裁です。

実際にF持ちの峰、丸岡選手は優勝戦だけでなく、節間を通してかなり慎重なSでした。そのSで優勝戦に乗ってくるのですから天晴れです。芦屋はよく「Sが早い」と言われるレース場でもあるので、丸岡選手は「ここは間違いが起こる可能性があるから…。追い風の時は特にダメだし、横風も追い寄りに変わった時の変化が大きいから難しい。自信を持って行けるのはコンマ20まで。それより早いSを自信を持っていくことはできないですね」と慎重に慎重を重ねたSでした。峰選手も「2本目は行けないし、勘のズレもある」とこちらも難しい状況であることを認めていました。だからこそ優勝戦は「2号艇ならターンに集中してそっちで勝負します」とレースを想定していました。

畑田汰一

スターからの提言

ペナルティーの大きさに峰選手は「僕らは決められたルールの中で走らないといけない。それでもルールで向上心のある選手から走る機会を奪うのがいいこととは思えない。個人的には罰金の方がいいぐらいですよ（笑）」と冗談交じりに話してくれました。「フライングスタート方式」というルールはボートレースの醍醐味の一つですし、そのルールを採用している以上はFも起きてしまうこと。Fが興業として大きな痛手なのは間違いありませんので、決してFを正当化することはできません。それでも、わざとFをする選手は1人もいないのです。誰しもが勝ちたい気持ちがあってのもの。全レーサーがどんな時でも全能力を発揮するレースをファンは楽しみにしているはずです。おっと、これでは「艇言」みたいですね。これ以上は藤原大先輩にお任せして、今月はこれまで！